



4411

續草菴和歌集卷第一

春

立春れろろと

久方れろろと山神代ろろと春は三月

早春

山深と露の雨も春風も春の初れ

入道二品親王家八十首

さくらをば松の宮も春の初れ

海邊早春

波がたつた春の初れ

春 三月廿一日
奈良生順氏

將軍家三首

海色庵

浦の浦の家もあつた家も地風吹かす秋の風

浦庵

わが心は里の心とて遠く立初て庵に神よか海海波

湖庵

よれ海さうくもて思暁小あくはあかしの鳴山

雪中一鶴

鶯の泣きけり春と立ゆりたはあかしの雪の海

和奇一鶴

和鶴

風をそお霜のふしの系に鶴はけりお雪の志

曙鶯

立の秋庵了とて思れあかしの山乃けり

春宮

梅よ花と見よとやゆりり春宮の春はあかしの

野若葉

予もさうかた思入事くは清いらの春はあかしの

入道二お親王家又十首

よの秋の梅も思ひあかしの雪もあかしの春はあかしの

前宮白家

若葉

浦の浦の言れりもあかしの梅の春はあかしの

二條家おまゝりて文よまわす 春夕雨

ゆふ鳥は翅を翳してうららかに海を渡るし 暮ぬれ

西園院二品親王家の人しくよつて文よ

まはり 帰鷹

ゆきゆくも井井屋の一はやゆると同くぬるらん

同宮五十首号す

あつやとりのめをゆらめぬ山さひぬる春井屋令

夕陽一入

て清きうひらきぬれぬあつやの春とりのけしん

海邊帰一入

清あつやのけしん 中まきあつやの同く清きうひらき

閑自家より起るとゆらめく清き一入

帰鷹

と清きうひらきぬれぬあつやの春とりのけしん

あつや一入

清きうひらきぬれぬあつやの春とりのけしん

將軍 松柳 原亭よりて之首号一清き

一特 海一

清きうひらきぬれぬあつやの春とりのけしん

飛井刑部 新羽 美野園西田原中より一入

守護土波 存孝 小のりけりまゝとて侍

しうのりけりまゝとて侍

高のりけりまゝとて侍

右のりけりまゝとて侍

高のりけりまゝとて侍

縫殿重自家少く山花と

嘆よりのりけりまゝとて侍

山子とて大調言家之旨 名取花

幾春のりけりまゝとて侍

右馬控以氏光事りて侍

山花

高のりけりまゝとて侍

冷泉宰相家系其園より人々侍りて侍

よみ侍りまゝ 山花

吹花のりけりまゝとて侍

元亨二年一二月大調言家一日十首よ

花

高のりけりまゝとて侍

入道二品親之家五十首よ

高のりけりまゝとて侍

將軍家柳原亭に花乃盛子三首寄 構

花乃盛子三首寄 構

山深く鳥来りて鳥けきとやの花乃盛子三首寄 構

同家よりあやし

山深く鳥来りて鳥けきとやの花乃盛子三首寄 構

彈正親王家の首

振嘆をばしとての春風は更津元なる花乃盛子三首寄 構

聖徳院文子題とてつて奇蹟とて

山家花

山家にあやふ人ぬぬとてつて花乃盛子三首寄 構

源意は中坊とて 閑居花と

山里に獨りつとてつとて花乃盛子三首寄 構

和園白殿とて 夕花と

山深く鳥来りて鳥けきとやの花乃盛子三首寄 構

松浦花とてつとて

山深く鳥来りて鳥けきとやの花乃盛子三首寄 構

清子入道大納言家守ありて奇蹟とて

一時に 夕花

山深く鳥来りて鳥けきとやの花乃盛子三首寄 構

花乃盛子三首寄 構

初瀬山橋よきしじゆのふらりとれて明き橋の言ふ

清軍寺花百首 一 軍居也

と新しき清くしむる花盛日比ととる人ふりらん

東山よ作のしむる花盛は清子た久細言のあ

りして侍けふふあいてくあひをそくうく

甲し花は枝よけきく

はれふり宿れ指乃橋を風ふらふはよふとふらん

かー

のくしとくえふらうりたれは橋おとれぬ宿乃花は盛ら

蓮阿彦をふく冷泉宰相あふのうまうし

花友

首の女ふりしむる花ゆへ人はたふ海春れ

西林寺二品親王家子首 一 里也

橋は里とくうれとる来て侍けふもあはつしとそふ

源意法下つ許よむ見よふかりてゆへな

聖護院二品親王まこくあされて宿のそ

人いひけつはきれと花ととるぬい嵐也そ

と新しき清くしむる花盛日比ととる人ふりらん

本れり花はてとくえふらうりたれは橋おとれぬ宿乃花は盛ら

宿のそくえふらうりたれは橋おとれぬ宿乃花は盛ら

花方寫

花のこゝろを嘆かすて言はれまはつて花をばかす言はれ

花交松

立寄しぬ深山橋を嘆かす言はれつゝの情をわらふ言はれ

玉如雪

橋を流し流しを言はれ言はれつゝの情をわらふ言はれ

源意江中坊を

花を言はれつゝの情をわらふ言はれつゝの情をわらふ言はれ

本寺文(實白)流しを

物言はれつゝの情をわらふ言はれつゝの情をわらふ言はれ

入道二品親王家五十首并

花を言はれつゝの情をわらふ言はれつゝの情をわらふ言はれ

將軍家を

半まを身流しを言はれつゝの情をわらふ言はれつゝの情をわらふ言はれ

花は比海前入る時秀并りて

花を言はれつゝの情をわらふ言はれつゝの情をわらふ言はれ

也

花を言はれつゝの情をわらふ言はれつゝの情をわらふ言はれ

花を言はれつゝの情をわらふ言はれつゝの情をわらふ言はれ

花を言はれつゝの情をわらふ言はれつゝの情をわらふ言はれ

何の紙

七十年此書... 花竹名後

見花

事等... 花如雪

花發同叙多

花發同叙多

基但固情... 花盛

花如雪

花如雪

花如雪

花如雪

花如雪

花如雪

花如雪

花如雪

まの落花

立派な山ありて山に花をばらけし梅らうありて山をばらけし

清子丸入道大御之茶花園より奇なる花

時 海邊花

海士丸佐破山梅らうりて山のまゝに衣袖白く

梅井二品親王家よりく 落花

梅花指し流るる雪ありて梅らうりて山のまゝに衣袖白く

入道二品親王家五十首奇なり

まことありて梅らうりて山のまゝに衣袖白く

花奇中より

長崎よりあはれし梅らうりて山のまゝに衣袖白く

源深法下末侍より 谷花

あまのありて梅らうりて山のまゝに衣袖白く

清子丸入道大御之茶花園より奇なる花

梅宿名

け春の月より山路に梅らうりて山のまゝに衣袖白く

花は比木情願よりく梅らうりて山のまゝに衣袖白く

所作

秋高と云ふ人ありて山里に花をばらけし梅らうありて

らうりて梅らうりて山のまゝに衣袖白く

とよこ山秋の夕さつりしおれは海よあめりる表はくし
入道二品親王家五十首并し 歎冬
ふふふてはるまてらんあひしりともふれ山の花
不虧光寺少く春花と

ひしきれたる一りれ花のまもり事ゆき此春乃春流
杉のしららと
多ゆり春あしあしは春花何そい波入ふりし吟ん
春花ははるふけい池水の底より浪打立しとて家
春歌言
散花乃あしとるしとてはるほしとてまはれおのころり

後光明院并白鳥あしとて 言書

花は夕の影に法あり散るしあしとて春成れりし
浦言春

中言はれりあしとてはる海舟の清とあしとてまは
入道二品親王家五十首并し

ひはれゆりて路よとれはるまはるしとてはるはる
三月並

いけふよひとてまはる春成れりたる名ははるしとてあはるん

其

前冥白殿通法之首昇一。 更衣。

花深江波と今朝あまらて春はくまと平河の春
冥白殿一てあま一心一

くはく一去と二交情の事一花乃乃神代別一
兼好ありて昇一後一。 昇一花

春は故之とひけり一教ととてあま一貴山一妙一橋と
葵

高一春は二藤乃乃の一た若と志一けら一お葵草一の
卯一也

若衣一とら初一く一か一り一白一あ一れ一あ一ま一を一鳴一く一を一乃一卯一也
入道二品親王家五十首昇一。

卯一也一ま一う一く一乃一あ一ま一明一知一て一今一う一り一い一く一初一也一を一後一也
侍部一云

年毎侍と明一ひ一あ一り一く一初一言一い一う一乃一部一云一也
入道二品親王家五十首昇一。

卯一也一ま一う一く一乃一あ一ま一明一知一て一今一う一り一い一く一初一也一を一後一也
侍子規

卯一也一ま一う一く一乃一あ一ま一明一知一て一今一う一り一い一く一初一也一を一後一也
卯一也一ま一う一く一乃一あ一ま一明一知一て一今一う一り一い一く一初一也一を一後一也

聖護院二品親王家にて郭云

あつひもあひいそつ時無月と申るれ村多り

前実白殿 近衛 少く侍郭云

一知れぬとまふれは時多すれはのつて時多し

入在二品親王家五十五と云

郭云とよつこもいそあへ今宵は月よあまふらん

將軍家之旨よ夜郭云

月郭云とよつこもいそあへ今宵は月よあまふらん

等物院権と大臣家や 源叔時鳥

志の侍人れとよつこもいそあへ今宵は月よあまふらん

二條入道大臣言家之旨よ

郭云とよつこもいそあへ今宵は月よあまふらん

基任因幡國よりよ五月五日尋くくつて

早苗 常盤

と青又あやと海と結作同のり種は早苗

入在二品親王家五十五と云 早苗

幸道河多し小田小舟と名そ早苗も也宇治川里人

河五月雨

約そそ海と海と水とあつひの今川乃五月雨は

京岡白殿少く五月雨

母と又かうしやふり多しあつた海に母をたはな
入道二玉親と家五十四首

河津のあふりしむらぎの波の下もよみされの比
六月雨久しうらみ

し白晝日忘れふりしうらみ月夜にうらみ
五月ぬれぬらみは二条中納言家より

あつた海にうらみは六月ぬれぬらみ
か

六月ぬれぬらみは六月ぬれぬらみ
六月ぬれぬらみ

限られぬ衣ほきりし六月ぬれぬらみ
六月ぬれぬらみ

岩代乃中一此松のもろもろし六月ぬれぬらみ
等特院確と大臣家之首は夏草

うらみは六月ぬれぬらみは六月ぬれぬらみ
明佳妻

そこのひのひのうらみは六月ぬれぬらみ
比下津身許あく 離明佳妻

屋下してあつたうらみは六月ぬれぬらみ
光政うらみは六月ぬれぬらみ

夏山の手前がくは月けいありあくとせれりく
浦夏月

夏山月のおぼれりく御もくそ明あはれ浦波
前岡白殿よりく鶴

あはれんと行くく鶴あはれりく明くよ不
実白殿續百首より 照射

夏山月のおぼれりく御もくそ明あはれ浦波
前岡白殿よりく鶴

あはれんと行くく鶴あはれりく明くよ不
実白殿續百首より 照射

あはれんと行くく鶴あはれりく明くよ不
実白殿續百首より 照射

あはれんと行くく鶴あはれりく明くよ不
実白殿續百首より 照射

あはれんと行くく鶴あはれりく明くよ不
実白殿續百首より 照射

あはれんと行くく鶴あはれりく明くよ不
実白殿續百首より 照射

あはれんと行くく鶴あはれりく明くよ不
実白殿續百首より 照射

しほの秋とてしほの山暮とてしほのきれきれしほの
あはれしほのしほのきれきれしほのしほのしほのしほの

六月後

あはれしほのしほのしほのしほのしほのしほのしほのしほの

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

續草菴集卷第二

秋

入道二和親王家六十首并一 初秋風

初秋風 初秋風 初秋風 初秋風 初秋風 初秋風 初秋風 初秋風

初秋風

初秋風 初秋風 初秋風 初秋風 初秋風 初秋風 初秋風 初秋風

兼侍七夕

兼侍七夕 兼侍七夕 兼侍七夕 兼侍七夕 兼侍七夕 兼侍七夕 兼侍七夕 兼侍七夕

和歌一首少く七夕橋

しらとりの雲は橋ふ天の河にゆく糸の玉をまらん
入る二品親王家みす首奇し

たうちもゆくりうらうら秋風を契に粧ひ星合はれ
右室いそふ人の秋風よさう善計して

小菟宰相中将家とて 源秋葉と

秋風の風より外れ善と外れ善とよのれ梅よ

和歌一首少く 夜秋と

秋風吹く秋の風 秋の風吹く秋の風

贈と大臣家と青 存秋

秋風吹く秋の風 秋の風吹く秋の風

実白殿漬百首と 秋夕

好と抑て秋の風吹く秋の風吹く秋の風

入道二品親王家みす首奇し

月夜よこまるにみぬる言と心づかぬ秋の風

草花

三登れ浦の尾花よの秋の風吹く秋の風

右室光吉の秋の風吹く秋の風

人の心はらん秋の風吹く秋の風

秋の風吹く秋の風吹く秋の風

聖護院二品親王家ノ

朝事日記

文殊殿に納り席や嘉奈風山御所家拂えん

同—こ家五十ノ奇—

秋苑に於てかろはく御堂へ由寺神にあそむる

多心家

紅葉にわらぬ子持花盛るる毎にさけりる

権之位一目忘—新極四次—人—

奇懐作— 果をまて

古里に流るる水に—村落に舟をさけりん

権—と長五首

序

駒井崎に花をすそけり夕日影のうらもゆひ—秋の空

以子と大御言家三首 草花鹿風

秋風よまほしく尾花にみゆのちそゆ流るる

入居二品親王家五十首奇— 康

海の小舟のりも何み秋に—あつたさひらん

夜鹿

東のむらぬもかろはく御堂へ由寺神にあそむる

厚心平宮三首 月前月麻

あまののり—秋津川に舟をさそむる御堂へ由りん

聖護院文六十首—序—

多山山是と云葉はけとる月れ桂子鹿の鳴らん
小倉大綱之尋ねはりて奇蹟也

閑居辭

中下経深事く奇蹟也
山

出の事とありて道下より善の意み袖を流し生

夜忠

閑守はらありひもわねんひも毎に松をみく

前伴と守貞世家とて

野られ松の中より

民下の家を育奇
初初

春の事とありて初居の都

路河雲白雲下ありて世は

山家初居

秋山の事とありて初居の都

入道二京親王家五十奇

厚の事とありて初居の都

蘆野月次書

源流の事とありて初居の都

九月十三日の事とありて初居の都

山のふもとにありては、
民衆の家五々あり。 月か山

かみくろのありては、
江戸歌謡すなり。 旗南社之音。 月

月影をこぼし、
八月十五夜將軍家とて。 芳上月

夕暮のありては、
色る月

待わくものありては、
中園入る大政大臣家とて。 月音一續作

風吹かすのありては、
入道二品親之家五十五音一。

りあて月の桂し、
里月と

はらりや露のありては、
等持院僧とて。 月音一

しきりや雪のありては、
九月十二夜園白殿にて。 百音一

ふりや雨のありては、
小 月音一

聖護院二品親王家五子

母藤原時子

下義家の子家とりし守り名は秋葉の月と云ふ

將軍家三子しし 月照子花

紫よりうき秋葉の美と云ふし即ちみく月は

月映子

けし秋葉の月と云ふは月は映ししと云ふ

八月十五夜は奇蹟しし 月前落

為さるる秋葉の落れ葉にむくくもるる月は

將軍家より 湖上月

しは海や満月のすむ月の水と云ふはれしと云ふ

いふしは秋葉の月と云ふは月は秋葉の月と云ふ

秋乃比耶波と云ふは秋

若くはくまのりは秋葉の月と云ふは

氏より家書し 河月

は秋水の月は秋葉の月と云ふは秋葉の月と云ふ

入道二系親王家より奇蹟し 月前出

は秋葉の月と云ふは秋葉の月と云ふは秋葉の月と云ふ

九月十三夜は將軍家より 月前落

秋葉の月と云ふは秋葉の月と云ふは秋葉の月と云ふ

八月十五夜は同家より 橋上月

す心月此新うきり森山にけりてけり流れ流の株
古寺月

照る秋の八重立をこれ流れは横川の春はすあつ月氣
九月十三夜宮白殿月百首奇蹟うき
しよ 月あは

うき流すう流れ流れはるるたうりか月をこき
百首流河二ふ秋立家とて 情月

合月をくしゆり流れとてや流れ流れも流れとて
九月十三夜宮白殿月 月あは

月あはう流れ流れよと流れ流れうき明かこの
長門の森一日の首奇よ 晴

あつるう白流れ流れは立時め敷わう宮て明流れ
二条入道久納言夜とてしよ 湖月

流れも流れ流れ流れ流れ流れ流れ流れ流れ流れ
照る流れ流れ流れ流れ流れ流れ流れ流れ流れ流れ
湖月

布流海に流れ流れ流れ流れ流れ流れ流れ流れ
海邊月

あつるう流れ流れ流れ流れ流れ流れ流れ流れ
あつるう流れ流れ流れ流れ流れ流れ流れ流れ

古集五言詩百首奇一

江清月近人

海上人如燈心火也非波也月也天也故云心火也
入道二京親王家五十一奇一

あけては煙心火也よはたの海海人のりや月は海也

浦月

第りて風を吹く海士の月也なるるるるの煙を

お軍家とて海月

吹風の使侍よのせらぬ月をゆき人海に舟人

兼定上人ありて奇一よまのり一河 江月

みかといはれありしやあわくはれ月は海にこころは

前冥白殿十五奇一 河上音

河川の海よのあおるるよはてそくそ海に舟に舟

音

橋のしはれとよのりくはれ里とて晴ぬしはれ河音

橋井二品親王とて 槿

とりれはれとてあや音のまらあはれさうわの花

九月十一日東将軍平家とて 槿衣

源平あやとてさうまはれはれなまらるる勢の衣とて人

あやとてさうま

菊

ぬんも老あふりやうんらん花打候の菊しし水
そのこころの山を執侍し可成り候と候と
とらして唐の山を極く候しし年しし
お察しししと候と候と

山に山しや身も候と人候と候と
年自秀く候と候と

お察しししと候と候と
今一ノ京親王家五十と候と

候と候と候と候と候と候と

續子秋葉集巻八の候と候と
薄く候と候と

お察しししと候と候と
お察しししと候と候と

九月盡

かきつるまゝに候と候と

凡そこの世にいふ所の人々をいふと、
西の家の五子 河原系

河原系は河原水とよび、
冥白殿和号、
奔河をせよとも、
若くは楠葉氏、
寒草

和号して、
前冥白殿水野社、
和名は、
入道二品親王家五十一

とや、
お軍家之者、
冬草は、
小丸丸宰相中将家

冬草は、
冬草は、
冬草は、
冬草は、

冬草は、
冬草は、
冬草は、
冬草は、

冬草は、
冬草は、
冬草は、
冬草は、

冬夜月

冬夜月
空に月ありて
照らすは
清き水に
映るる月影

奥山に松立の影ありて
照らすは
清き水に
映るる月影

北橋寺の松立の影ありて
照らすは
清き水に
映るる月影

北橋寺の松立の影ありて
照らすは
清き水に
映るる月影

北橋寺

北橋寺の松立の影ありて
照らすは
清き水に
映るる月影

北橋寺の松立の影ありて
照らすは
清き水に
映るる月影

北橋寺の松立の影ありて
照らすは
清き水に
映るる月影

北橋寺の松立の影ありて
照らすは
清き水に
映るる月影

北橋寺の松立の影ありて
照らすは
清き水に
映るる月影

奇のそつよき付ゆ

とじ浦をうくを娘 其なまきり方ありと云はれり
入る二品親王家五十そ奇よ

越れ海のわろをれと書おろし通しよ馬はさし
夜綱代

月さしとる海ありん日とる海もたり一潮あり
実白殿とて 綱代

綱代守祢ぬの座に物より流るる海を定座に海を
小野に流るる人のよまを流るる

焼燧火

焼燧火とてうらひの雲あり 秋雲とて雲しし燧火は
石山座と備正代防とて 同歌

松は海舟あり 船のきり船はてとてゆく 雲霞う那
入道二品親王家五十そよ

教れと云摘れ松とて青とて枝は一打防ありれ
巨方上人とて女侍 小野社とてよ 雲

と物も松はりりともありかき病や言けりあふる日守とて
野とてよ長安とてよ 遠山言

今朝これいしとて理じ松葉ありいよとて言守とて
石山座と備正防とて 朝雲

残形くも里丸山と云ふ斗宮に御守の元之様あり
皇の二條宰相尋ありて尋獲せし時

遠山宮

降書に記す所を此宮に於て見らるる御守は
計一座大殿殿 今国司此宮院と云侍一具
とのとも木よりぬき方の満松ありて
流るるくをくまをくして侍りぬ
天流人よりかゝりてよみ志くしは事なきに和奇
此浦松よりけり流流の流もかゝりて流制家
とらふらとらふりて此宮遠山宮奇しき

一 大殿に御書よのせり流流と云侍り
て入侍り

妙く書れしと云く流くはとらふ流流流と云く

大殿山名

皇母より照したる御守もあつて此宮にのりて
國々の家一日子そしよ

と云く流つてはとらふとらふとらふとらふとらふ
あつてとらふとらふと

身なる流流しん流守此流りてとらふとらふとらふ
河名二宮

手紙に済たに川をあらわすにうらやましく見ゆるに
海を言ふ

田舎の浦も宮もまた静かき海に波もゆるりし
舟も静かに流るるに
舟子も大に言ふに
舟波のこぼれは山をうらやましく見ゆるに
舟子も大に言ふに

橋上朝言

と青い水もたれは静かに
入道二系親王家五十そと
宮に朝言をみぬ秋ももも
雲霞日小野もたれは静かに

みれば山はつらつらと
此里のつらつらと
松言

松言

言ふもあはれ
前賢白敷も

志賀の浦も
舟子も大に言ふに

湖言

今朝言をみぬ
今朝言をみぬ

家河恋

錦衣少を出入我神よせし龍田河安し御も

兼恋

涙も人めれ御ふの心御誓ふ中か家とたれ

藤原基世奉あく奇よみ侍り。高き恋

宿風吹吹く空を吹かす数いさひあり侍り

彈正平親まふく 平恋恋よ

人めれははしと同一ふんていもいさひに於て中か

等持院駒さ大匠家之青尋。見恋

一親うせめあくわくは海あも何申りくはらめ成らん

將軍家少く 立名恋

思ひ河立あは波と使ゆくはゆふ海へのわきせしあか

の同くは家之青尋よ。不恋恋

あもあはくはしと同一も恋そめて君後世は行くはん

赤木恋よ

町あはくはしと同一も恋そめて君後世は行くはん

真白殿續百首。列恋

あはくはしと同一も恋そめて君後世は行くはん

不恋恋

甘あて又あはくはしと同一も恋そめて君後世は行くはん

あつる身をまねてとけ敷くれあふと浪たひひたつてよ
和舟一舟余も舟同しと

命はなまじりよしとあつる浪をひの浪を海へ舟
等持院増さ大長家之旨よ 名もあ

伊勢の海よはては海におもふれあひかゝりてあつる
西都の二條宰相より舟もあつるよ

あつる身をまねてとけ敷くれあふと浪たひひたつてよ
あつる身をまねてとけ敷くれあふと浪たひひたつてよ

あつる身をまねてとけ敷くれあふと浪たひひたつてよ
あつる身をまねてとけ敷くれあふと浪たひひたつてよ

あつる身をまねてとけ敷くれあふと浪たひひたつてよ
あつる身をまねてとけ敷くれあふと浪たひひたつてよ

あつる身をまねてとけ敷くれあふと浪たひひたつてよ
あつる身をまねてとけ敷くれあふと浪たひひたつてよ

あつる身をまねてとけ敷くれあふと浪たひひたつてよ
あつる身をまねてとけ敷くれあふと浪たひひたつてよ

あつる身をまねてとけ敷くれあふと浪たひひたつてよ
あつる身をまねてとけ敷くれあふと浪たひひたつてよ

あつる身をまねてとけ敷くれあふと浪たひひたつてよ
あつる身をまねてとけ敷くれあふと浪たひひたつてよ

よひのちらうとてしるれおとあつ世にけくけがれ系
侍志

偽とれむしよとそらるれおとあつ世にけくけがれ系
今いぬとぬと物れたといひ持てし物あつれつ
婿に大長あつてあつて

ふふふとてまゝとれもつあつていふとていふとて
聖護院交ふとておととてて争ふとていふ
ふ 月前侍志

わくれれ何と物れ月前侍志といふとていふとて
九月十三日お軍家とて 亥月侍志

ふふふとてまゝとれもつあつていふとていふとて
冷泉寺おとあつていふとて 亥月侍志

あつていふとていふとていふとていふとて
侍志

あつていふとていふとていふとていふとて
侍志

あつていふとていふとていふとていふとて
侍志

あつていふとていふとていふとていふとて
侍志

別恋

契とく人けにぬる路に面影計何とぞあはれ
横波守孝朝の家にておのれ一とらと

身れ着とけやうかむむ事ふりたためてゆかあはれ
花山院入名大納言家ゆく 曉あ恋

ゆよ衣子ぬる計ををぬえとてゆははる事けきとつれ
右集五言歌百首よ 別後會難却

あはれいよし計け今もにたつらうとあはれ
兼宣上人事く奇くまはれ時 契あ恋

うしとてふとてたぬもねれくまはれとてあはれ

お軍家音よ 契あ恋

契とくはれ月日とよりわたりわたり別乃みそふれん
おのれ一あはれと 契あ恋

うけりかのあはれとてうしとてあはれ契と
遇不逢恋

誰波人からなく高れ一とてあはれとてあはれ
契あ恋

備後と何うかむむ秋風の吹ぬるはれ契と
山子た大納言家ゆく 契あ恋

かこくよ我身と浦あはれ長途をく神事とてあはれ

古集五言歌百首。三年不見書。

鳥居清満の一首か、秋の夕べの光景を詠む。

古集五言歌百首。

鳥居清満の一首か、秋の夕べの光景を詠む。

鳥居清満の一首か、秋の夕べの光景を詠む。

鳥居清満の一首か、秋の夕べの光景を詠む。

鳥居清満の一首か、秋の夕べの光景を詠む。

鳥居清満の一首か、秋の夕べの光景を詠む。

鳥居清満の一首か、秋の夕べの光景を詠む。

鳥居清満の一首か、秋の夕べの光景を詠む。

鳥居清満の一首か、秋の夕べの光景を詠む。

鳥居清満の一首か、秋の夕べの光景を詠む。

鳥居清満の一首か、秋の夕べの光景を詠む。

鳥居清満の一首か、秋の夕べの光景を詠む。

鳥居清満の一首か、秋の夕べの光景を詠む。

鳥居清満の一首か、秋の夕べの光景を詠む。

鳥居清満の一首か、秋の夕べの光景を詠む。

鳥居清満の一首か、秋の夕べの光景を詠む。

後後多志

とくきし 控れつと 橋河をて 控りひきひて 未とる

重後院宮より 契絶志

とひわつひいあくとも 契絶志 申しつりつり 契絶志

た馬つ入る志より 契絶志

うらうとも 契ひい 我方より せめて 契の未とる

後志

契今たぬとも 契ひい 契りくも 契り 契り 契り

年 契り 契り 契り 契り 契り 契り 契り 契り

契り 契り 契り 契り 契り 契り 契り 契り

契り 契り 契り 契り 契り 契り 契り 契り

契り 契り

契り 契り 契り 契り 契り 契り 契り 契り

契り 契り 契り 契り 契り 契り 契り 契り

契り 契り 契り 契り 契り 契り 契り 契り

契り 契り

契り 契り 契り 契り 契り 契り 契り 契り

契り 契り 契り 契り 契り 契り 契り 契り

契り 契り 契り 契り 契り 契り 契り 契り

契り 契り 契り 契り 契り 契り 契り 契り

夕月兼鶴を鳴あつあつ衣たむけ流氷塔や流ん
右集入言歌百首よ 流水後之松

かきよーや若母父あつあつやれ中世を落さきよし河
長河似帯とくよとを

玉川のあれ流のゆりたえぬやをて井てれ帯
寛耀僧教よ法とあつて作とあきく
とろりゆりてよと

雅波津の月れん乃通ひてを繪寫う成れ流もくん
雨後眺望

流氷よりとみくそよらうとよらぬ浦もあけけし流氷流ん

右集入言百首よ 蒼苔満山鍾

書ぬより日記のみと流氷あけくい毛けとる若れ流氷
お軍談之音よ 山路を

白をれ理じ山路の末をれをう白く川ろくを録れけ橋
山家

く今よりあしとあひとあひとあひとあひとあひとあひと
志のたけく山月日れとそくれ若てそくく行へうりう流

所後院まよて 山家松と
松風おきとあつてすくさうあせあて人あのみぬ解ふ

乙山産之僧正坊あく同くころと

河水は平流にぬけしすしはあつていじりあはれは

平流院二品親王家後八首 舞中見月

のしるい言語たえぬも枕月を都の面影あして

九月十二日秋東下野入道宗英撰白大まの目

入道常端もく奇蹟傳しよ 月夜振

草枕しよの落し座しる也山路とくくよの月をけ

お軍家母く 舞中見

くくまそ前よのあつての山所をしる書もあつてん

舞中見傳しよ 舞中見

初よこし落おれはあつてお言はひりよのうや越せん

二條前軍おみのの圓うりせりて言はあつて日

くくし神しよのうや

あつてのうやあつてのうやあつてのうやあつてのうや

あ

あつてのうやあつてのうやあつてのうやあつてのうや

入道二品親王家又十首舞しよ

しよあつてのうやあつてのうやあつてのうやあつてのうや

あつてのうやあつてのうやあつてのうやあつてのうや

海路日言とらしよ

あつてのうやあつてのうやあつてのうやあつてのうや

包紙

伊勢海のまゝに諸君をさうひりうりうりなれば
世勢ひらるる人子首等と種々みせしむ
なをさうとてけいこみ。

所望よりうらまひのまのりなれば海は
小宰相局隆親の事とすめゆくと種々
流してと文一何尋しむまるとして
尋れ浦のまのりとしてゆくとす。

も所望をかきとてまのりなれば海は
山子た入道大納言のまのりとしてゆくとす。

ゆくとす侍一を因重とすまのりとして
行て當時れ明近とすくと抛本とすゆくと
入道教訓一ゆくと海とす一実向殿何のまのりとして
ゆくとすゆくとす。

物おまのりひらしてまのりなれば海は
ゆくとす。

中し井のまのりけりなれば海は浦のまのりなれば
義撰養現れれば修理とす入道保良孫のまのりとして

和尋れ浦とすひらしてゆくとすゆくとすゆくとす
ゆくとす。

和奇此浦小入舟一舟の今更なるれむいふも何れりん

長秀

中条公房

新撰遺事入る和奇と為る

去舟一つり一舟一時

今更なるれむいふも何れりん

也

和奇此浦小入舟一舟の今更なるれむいふも何れりん

和奇此浦小入舟一舟の今更なるれむいふも何れりん

和奇此浦小入舟一舟の今更なるれむいふも何れりん

古集又書部百首

天色無情淡

和奇此浦小入舟一舟の今更なるれむいふも何れりん

一聖護院二品親王家

五首

五月末懐

和奇此浦小入舟一舟の今更なるれむいふも何れりん

和奇此浦小入舟一舟の今更なるれむいふも何れりん

末懐

和奇此浦小入舟一舟の今更なるれむいふも何れりん

和奇此浦小入舟一舟の今更なるれむいふも何れりん

和奇此浦小入舟一舟の今更なるれむいふも何れりん

和奇此浦小入舟一舟の今更なるれむいふも何れりん

和奇此浦小入舟一舟の今更なるれむいふも何れりん

性融

村入道

和奇此浦小入舟一舟の今更なるれむいふも何れりん

和奇此浦小入舟一舟の今更なるれむいふも何れりん

て争いまわらぬ

玉手海入のこころあつらふに恥ぢひあはぬ神のこころ

懐田

夏もよのひのひとあはれおぼれ道よとあはれ

煙太寺内大臣家進長持新御寄とあはれ

懐田

あつたかきりしあつたかきりしあつたかきりしあつたかきりし

茶花園少くは臣の家を忌佛事これ

争い

身秋のふとあつたかきりしあつたかきりしあつたかきりし

あつたかきりしあつたかきりしあつたかきりしあつたかきりし

あつたかきりし

春のあつたかきりしあつたかきりしあつたかきりしあつたかきりし

あつたかきりし

あつたかきりしあつたかきりしあつたかきりしあつたかきりし

二條殿のつれ室のあつたかきりしあつたかきりしあつたかきりし

日佛事とあつたかきりしあつたかきりしあつたかきりしあつたかきりし

あつたかきりし

あつたかきりしあつたかきりしあつたかきりしあつたかきりし

あつたかきりし

くもりけりやうりつと秋は月夜にぬ神代酒よ
二品親王新大納言さくならうての友に 里
と海に思ひつゝととよすむ山は緑
れ松風とて舞とよまればけりうらむとて
をうりよとてめく鍾形紙よ志持しよ
きうらふもさうの一同とておのれつゝ
洛河上人入職は九月盡日他阿洋よ。まきゆ
秋よとておのれつゝ人のよめつゝあさつゝのん
む

二品法親王の家五十首よ

形又おのれつゝおのれつゝおのれつゝ
夏秋つ一回れおのれつゝの及人よ舞讀侍しよ

懐旧

めりあひておのれつゝおのれつゝおのれつゝ
源光政秋山身ゆりては父光助 ありつゝの
さつひとておのれつゝおのれつゝおのれつゝ
おのれつゝおのれつゝおのれつゝ
まて世よとておのれつゝおのれつゝおのれつゝ
氏非心われられては若少納言入道おのれつゝ

許より

教はらうふの文とて海人同く老の歳はあはれ
と

我の行老をれ社のまゝお集りけりおれは何れ
まの記釋お

まのまの記釋お
まのまの記釋お

湯はよ味の蓮はあはれ水はあはれ
昌系上人坊より釋教を

なのはらうふの文とて海人同く老の歳はあはれ
民部口一回に佛事の時一品経をよ安

樂しお亦不親近政權漁捕
陸奥はらうの文とて海人同く老の歳はあはれ

持僧正 お 入藏は及百済寺よりよ
二首よはあはれ

のあはれまのまの記釋お
吉田の大臣家よりよ

寛樹多の花鼻元生不遊樂
鶴山はらうの文とて海人同く老の歳はあはれ

徳大寺の大臣家よりよ
徳大寺の大臣家よりよ

紙に為よとてあらまうとて。無之悪趣に
わがわが。非波はらふのうとて。おまじい。漕をあら
入道。二京親王家又十首奇。

昔より。玉井泉の。池を。洗井よ。宝に。池。く。つ。られ
き。れ。う。ら。ま。く。れ。神。教。乃。奇。よ。あ。い。し。ん。清。と
あ。ひ。一。奇。

福と。高。よ。こ。と。入。も。う。り。く。く。く。秋。乃。よ。の。月
お。新。河。野。と。大。臣。家。の。夢。あ。う。り。て。天。地。を
福。と。う。く。く。を。す。め。お。ま。う。し。よ。

大。元。の。星。の。く。わ。と。い。ひ。の。引。と。君。の。か。さ。じ。の。ろ。を。う。り。し。よ
草。河。野。家。あ。く。冷。泉。亭。相。奇。よ。ま。ま。の。如。し。よ
神。祇

和。の。り。と。今。と。神。代。代。名。あ。く。と。ま。い。ふ。た。の。あ。ま。海。の。石
日。吉。村。よ。こ。こ。り。一。時

あ。い。ま。ま。ま。の。石。の。く。ち。の。想。神。は。く。ま。の。お。と。あ。い。よ
神。本。池。を。池。に。は。十。二。月。の。つ。ら。大。宗。院。の。う。り。の
号。よ。清。涼。の。一。奇。奇。奇。と。思。の。く。く。よ。神。の
く。ま。の。れ。ら。絶。て。言。よ。と。く。あ。れ。換。へ。く。く。と。い
と。換。へ。ぬ。く。く。よ。

敷。く。ぬ。我。身。に。よ。の。愁。ふ。神。の。物。体。を。く。く。く。世。よ

あり

善く一帯をたぬきひらくおろくんと神の慈も

は中野証すめ作一 祇園社之音 神祇

鳥として是れよもいふ神匠の持てけらまはれぬ

贈さ大長家のあし一社よそとてまう

之音よ 神祇

えいこのあそまのりん神匠であつてまはれぬ

冷泉宰相茶花園少く音よまのれ

同しんを

やうとあわたりも格と成れれ今と神匠のなをけり

和音 第三音よ

音神祇

作善神よものいかにけりていふ一と成りてなをけり

屋望月よ

神祇

目はみぬ神のつとけ成り人よまうあそまはれぬ

は中野新巻のほけり一り作一町名あ

そそ人、音懐作よ 祝のらと

あそまのつとけ松東ありていかに別とてまをいひん

勅撰披寫けは保まは中野坊とて人よ音懐

作

りまは漕いよあそ一和音のあそまはれぬよのあそ

おぼれて まゝの神よ まいおめ ちよとたの
夕ほく杖 おぼつちよも とれおめ ちよとたの
丹生れけ おぼつちよも けうちり ちよとたの
和宮れけの おぼつちよの ちよとたの ちよとたの
おぼつちよの おぼつちよの ちよとたの ちよとたの
あつちよの おぼつちよの ちよとたの ちよとたの
あつちよの おぼつちよの ちよとたの ちよとたの
あつちよの おぼつちよの ちよとたの ちよとたの
あつちよの おぼつちよの ちよとたの ちよとたの
あつちよの おぼつちよの ちよとたの ちよとたの

中みちの ひらきまじに みらあめ そと難波つ
よりあふ 日れおめえ すまぬま ちよとたの
おらまけと けあひまを きりおめ けあひまを
いさみけと けあひまを きりおめ けあひまを
ありまけと けあひまを きりおめ けあひまを
まよせけと けあひまを きりおめ けあひまを
いさみけと けあひまを きりおめ けあひまを
まよせけと けあひまを きりおめ けあひまを
いさみけと けあひまを きりおめ けあひまを
まよせけと けあひまを きりおめ けあひまを
いさみけと けあひまを きりおめ けあひまを
まよせけと けあひまを きりおめ けあひまを
いさみけと けあひまを きりおめ けあひまを

ひ月と氣と...
志屋...
りや...
草十名十

あ...
本名十

鳥名十

魚名十

出石十

わ...
氏...
部...

揚...
作...

し...

あ...

詠諧

これと人けりあはれん

かたむねの心もあはれぬとて春を惜まじ

あはれとて今春を惜まじとて春を惜まじ

あはれとて今春を惜まじとて春を惜まじ

あはれとて今春を惜まじ

あはれとて今春を惜まじとて春を惜まじ

あはれとて今春を惜まじ

あはれとて今春を惜まじ

あはれとて今春を惜まじ

あはれとて

あはれとて今春を惜まじ

あはれとて

あはれとて今春を惜まじ

あはれとて

あはれとて今春を惜まじ

あはれとて

あはれとて今春を惜まじ

あはれとて

あはれとて今春を惜まじ

續草菴集卷第五

連歌

春の心はさくらにやうく
 花の心はさくらにやうく
 春の心はさくらにやうく
 花の心はさくらにやうく
 春の心はさくらにやうく
 花の心はさくらにやうく
 春の心はさくらにやうく
 花の心はさくらにやうく
 春の心はさくらにやうく
 花の心はさくらにやうく

雨の心はさくらにやうく
 花の心はさくらにやうく
 雨の心はさくらにやうく
 花の心はさくらにやうく
 雨の心はさくらにやうく
 花の心はさくらにやうく
 雨の心はさくらにやうく
 花の心はさくらにやうく
 雨の心はさくらにやうく
 花の心はさくらにやうく

侍

かきとくしよゆきあみらりよそく
ひしよはたしよもあつてさうりり
いふをよ

清く日を照しくかりしゆゆ
古寺は昔のかりし路路して
うりし流しよあまのいしよあ
し朝よそも朝よは霜よまし清
よは北の町よをここのちりり
あつてさうりりいふをよ

うれよよき風よはなまよと志家物を
いふ人よはつてあまをよいひ
あつてさうりりいふをよ
朝よあつて流しよあまのいしよ
あつてさうりりいふをよ
うれよよき風よはなまよと志家物を
いふ人よはつてあまをよいひ
あつてさうりりいふをよ
朝よあつて流しよあまのいしよ
あつてさうりりいふをよ
うれよよき風よはなまよと志家物を
いふ人よはつてあまをよいひ
あつてさうりりいふをよ

大殿跡を秋よの風よのき氷と意
此のよきよきよきよきよきよきよ

河津の月よりの申よきよ

此のよきよきよきよきよきよきよ

あり明れけりよきよきよきよ

霜のよきよきよきよきよきよきよ

浪のよきよきよきよきよきよきよ

何よきよきよきよきよきよきよ

ぬれ夜の文ぬれ及よきよきよきよ

かきよきよきよきよきよきよきよ

ありけりよきよきよきよきよきよ

きよよきよきよきよきよきよきよ

里れ名をよきよきよきよきよきよ

丸日乃月よきよきよきよきよきよ

喉ら流の種よきよきよきよきよきよ

山旅の衣よきよきよきよきよきよ

あきにはよきよきよきよきよきよ

志りよきよきよきよきよきよきよ

花ありよきよきよきよきよきよきよ

たれよきよきよきよきよきよきよ

此一帖之授合落字未如書之
在也

明憲二年三月廿一日

大綱言法中
在

此集以竟孝門牙江印竟憲自書之
在無相違字字在也

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

